

# 小説『坂の上の雲』

「まことに小さな国が、  
開化期をむかえようとしている。」(中略)  
「伊予の首邑は松山。」  
城は、松山城という。」



『坂の上の雲』第一巻より

主人公たちの人生をたどりながら、  
「近代国家」の仲間入りを目指す明治の日本

司馬遼太郎さんが四十代のほとんどをかけて完成させた小説『坂の上の雲』。  
物語は、正岡子規、秋山好古・真之兄弟の三人の人生をたどりながら「近代国家」の仲間入りをしようとした明治の日本を描いています。

何もかも新しくつくりあげねばならなかったこの時代は、学問さえすれば何者にもなりえた時代でした。貧しい下級武士の家に生まれた好古と真之は、軍人の道を選ぶことになり、好古は草創期の日本騎兵を育て、真之は日本海軍における近代戦術の確立者としてそれぞれの道を歩んでいきます。子規は新聞記者となり、近代俳句、短歌、文章の革新に力を注ぎました。

東洋の小さな国に過ぎなかった日本が、西欧諸国に追いつこうと懸命に国づくりを行った姿から、多くのものが見えてきます。

## 松山を舞台に 親交を深めた 登場人物たち

正岡子規と秋山真之はともに松山藩士の父を持つ親友同士でした。

子規は叔父・加藤拓川を頼って上京し、漱石との交友がはじまります。前後して真之も兄好古の招きで上京、二人はともに大学予備門をめざします。

帰省中の子規とベースボールが縁で親しくなった河東碧梧桐や高浜虚子も文学を志すようになり、

寒川鼠骨らも加わります。

子規は松山中学校の英語教師として赴任中の漱石と、大いに文学を語りあいました。子規の友人柳原極堂は『ほととぎす』を発行するなど子規を後援しました。

晩年、好古は北予中学校長に、拓川は、松山市長として、国際舞台での経験を基に、郷土の発展に尽くしました。

## 司馬遼太郎さんは子規がとても好き

### 子規好きが、 小説の出发点となった

「子規について、ふるくから関心があった。  
ある年の夏、かれがうまれた伊予松山のかつての士族町をあるいていたとき、子規と秋山真之が小学校から大学予備門までおなじコースを歩いた仲間であつたことに気づき、ただ子規好きのあまりしらべてみる気になった。小説にかくつもりはなかった」

『坂の上の雲』第一巻あとがきより



## 明治を生きた3人の足跡

### それぞれの道で白い雲を目指した主人公たち

#### 秋山好古

(1859～1930)  
軍人(陸軍大将)・教育者



松山藩士・秋山久敬の三男。中歩行町生まれ。好古は、藩校明教館、大阪師範学校、陸軍士官学校から陸軍大学へと進み、旧藩主・久松定謨に伴い、フランスに留学。フランスには子規の叔父・加藤拓川が外交官として赴任していたため、旧交をあたためています。好古は、日本の騎兵を戦略機動集団に育て、騎兵の父と呼ばれます。日露戦争では、世界最強と言われたロシア騎兵を相手に戦い、日本の勝利に大きく貢献。退役後は、松山の北予中学校の校長となり、余生を後進の育成に尽くしています。71歳で死去。墓は、松山道後の鷺谷墓地と東京青山墓地にあります。

#### 秋山真之

(1868～1918)  
軍人(海軍中将)



松山藩士・秋山久敬の五男。中歩行町生まれ。松山中学を中退して上京。子規とともに大学予備門で学びますが、中退し、海軍軍人の道を進みます。海軍兵学校を首席で卒業し、日清戦争を経て、米國へ留学。日露戦争では、連合艦隊司令長官・東郷平八郎の作戦参謀となり、日本海海戦でバルチック艦隊を撃破しました。そのときの電文「本日天気晴朗なれども波高し」は名文として今も残ります。海軍大学校教官、海軍省軍務局長を歴任し、海軍中将まで出世しましたが、49歳の若さで病没しています。天才的な戦術により、東郷平八郎は「智謀湧くが如し」と賞賛しました。

#### 正岡子規

(1867～1902)  
新聞記者・文学者



松山藩士・正岡常尚の次男。藤原新町生まれ。大学予備門から帝国大学に進みます。その後、日本新聞社に入り、俳句の革新を叫んで日本派俳句を確立。伝統の文芸に新しい息吹を与えました。子規は病の床についてからも文学への情熱はますます旺盛で、「歌よみに与ふる書」で短歌革新ののろしをあげ、時代にふさわしい新しい表現を模索しつづけます。漱石とともに平明な日本語の散文を作り上げ、後の文学の発展に大きな足跡を残しています。このほか松山にベースボール(野球)をはじめて紹介。およそ35歳で病没するまでに「竹乃里歌」「俳諧大要」「仰臥漫録」「病牀六尺」など多くの著作を残しました。

## その他の登場人物紹介

#### 加藤拓川

(1859～1923)  
[政治家]



子規の叔父で、子規を陸羯南に引き合わせた人物。司法省法学校で学び、その後渡仏。外交官、衆議院議員、松山市長を務めた。

#### 河東碧梧桐

(1873～1937)  
[俳人]



虚子とともに子規門の双璧。子規没後、主観的、個人的な描写で斬新な表現を求める新傾向俳句を唱えた。

#### 夏目漱石

(1867～1916)  
[小説家・英文学者]



明治28年に松山中学校の英語教師として赴任。子規と愚陀佛庵で52日間同居。『坊っちゃん』など多くの名作を発表した。

#### 高浜虚子

(1874～1959)  
[俳人]



碧梧桐とともに子規門の双璧。明治31年、俳誌「ホトトギス」を継承。客観写生や花鳥諷詠を主張し、有季定型俳句の発展に貢献した。

#### 柳原極堂

(1867～1957)  
[俳人]



明治30年に俳誌「ほととぎす」を創刊。生涯子規を顕彰し、晩年は「松山子規会」創立に力を尽くした。

#### 寒川鼠骨

(1875～1954)  
[俳人]



子規門弟。子規没後は根岸の子規庵保存に生涯を捧げる。とともに子規遺墨集や分類俳句全集などの出版につとめ、子規顕彰に力を尽くした。